

城・集落からみつかった文字

文字は、古代より行政やまじないの場で使用されるなど、社会的な役割を果たしてきました。さまざまな情報を有する文字資料からは、当時の社会や文化に関する情報をより具体的に知ることができます。遺跡の出土品から人々と文字の歴史を探ってみましょう。

◆古代

(1) 集落からみつかった文字

任海宮田遺跡（平安時代）^{とうみみやた} 神通川左岸の大規模集落で、約 810 点にも及ぶ墨書土器（文字内容は約 80 種）のほか円面硯、石製帯飾りなどが出土しています。50 点を越える墨書「城長」（写真 1）は、「墾田」（新たに開墾した田）などの墨書土器の存在から、この地で大規模な土地の開発・経営を押し進めた有力者の役職名や人名と推測されます。



写真 1 「城長」の墨書土器

(2) 官衙(役所)関連遺跡からみつかった文字

米田大覚遺跡（平安時代）^{よねだいかく} 越中国新川郡家に比定されており、掘立柱建物群の南の一群が郡庁域と推定されています。遺跡からは 200 点を越える墨書土器や風字硯、石製帯飾り、斎串（木製祭祀具）などが出土しました。墨書の内容には、①人名や役職名（「田邊」「道公」「公磨」「富女」「人長」など）、②施設名や地名（「井」「室」「家」「正本」）、③物品（「酒」）、④則天文字（「卍」）（写真 2）、⑤その他（「桑」「中」「柴」「十」）などがあります。則天文字は中国唐代の則天武后が 7 世紀末に考案した呪力をもった文字とされており、墨書の約半数を占める「井」は呪符記号とも解釈されています。



写真 2 則天文字の墨書土器

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（奈良・平安時代）^{みずはしあらかち つじがどう} 古代北陸道の駅家水橋駅と推定される官衙建物群があり、墨書土器や転用硯、石製帯飾り、平瓦、斎串などが出土しています。溝から出土した「竈神」の墨書土器から、カマドに対する祭祀行為が行われたことが分かります。

総曲輪遺跡（奈良・平安時代）^{そうがわ} 「宅持」「木」と書いた墨書土器が出土しており、官衙関連施設か開発の拠点施設があったと推測されています。

(3) 祭祀関連遺跡からみつかった文字

豊田大塚・中吉原遺跡（平安時代）^{とよたおおつか なかよしわら} 新川郡家（米田大覚遺跡）の祭祀場とされており、流路から人面墨書土器（写真 3）や人形、斎串、「×」と書いた墨書土器等のまじないの道具が出土しました。疫病神や鬼神の顔を描いた人面墨書土器や人間の形をした人形は、病や災いを封じ込めて川に流す儀式に使われました。「神服小年賀」という人名が墨書された人形は、この人物の病氣治癒等を祈願したものと思われています。



写真 3 人面墨書土器

(4) 生産関連遺跡からみつかった文字

栃谷南遺跡（奈良時代）^{とちだにみなみ} 須恵器や瓦などを生産した窯跡です。へらで刻書した「恵師」「國」の存在から、土器の焼成に携わる工人の恵師（画師）の派遣が推測されます。

◆中・近世

(1)城跡・城下町からみつかった文字

太田本郷城跡（戦国時代） 越後上杉氏の越中進出の拠点となった平城です。堀からは300点を超えるかわらけが出土し、うち3点に墨書がありました。写真4は、「八月卅日のト九月つ黄可得しまいぬ」（8月晦日に占って見たが、すぐ9月になって月が替わってしまった）などの解読案があり、天正年間頃の上杉陣営で行われた吉凶占いに關わるものと推測されています。



写真4 占いに關連する墨書土器

願海寺城跡（戦国時代） 上杉謙信方の武将寺崎民部左衛門尉

盛永・喜六郎が居城し、天正9（1581）年に織田信長勢に攻められ落城した平城です。内堀から出土した木簡には、表に「多て王き」、裏に「暫王り多て己」とあり、たてわきは人名・館に關する名称など諸説あります。そのほか、将棋の駒の「歩兵」も出土しました。

富山城下町遺跡（江戸時代） 上級藩士の戸田式部屋敷から、「戸田式部」と記した木簡や「山イ福澤屋」の木札のほか、当時の信仰がうかがえる天神信仰板絵、吉凶占いに用いた「占」と書いた越前焼すり鉢（写真5）などが出土しました。その他、町屋では商いの木札や「大福帳」（帳簿の一種）と書かれた木箱など、町人の暮らしぶりが分かる文字資料があります。



写真5 越前焼すり鉢「占」

(2)集落からみつかった文字

水橋金広・中馬場遺跡（鎌倉・室町時代） 新川郡西部にあった高野荘の荘園經營に關わった村落領主の館があった遺跡と推測されています。方形の館の北辺を区画する大溝からは、呪符木簡（図1）が出土しており、何らかの呪術行為が推測されます。

(3)祭祀關連遺跡からみつかった文字

塚根経塚（室町時代） 法華經を小石に一字ずつ墨で書き写した7万個を越える経石が埋納されていました。その中には「為妙慶」と記した石があったことから、妙慶という尼僧の火葬骨を分骨して納める際、経石と一緒に埋納して冥福を祈ったと考えられています。

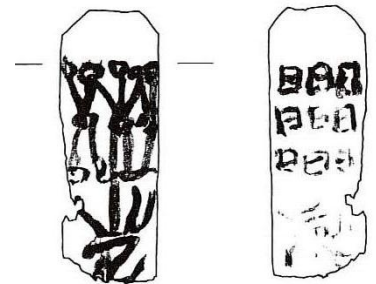


図1 呪符木簡

人々と文字

古代は、文字資料を残した遺跡の多くは役所や荘家・寺院などでした。文字は役人をはじめとした限定された人々が使用するものであり、人や物、土地などを管理するための手段として存在しました。また、医学や科学がまだ発達していないこの時代には、文字は呪力を持ったものとしてまじないの場でも用いられました。こうした文字のあり方は、奈良・平安時代に都から各地に赴任した役人らによって伝えられたものでした。

中・近世になると、文字は広く一般に広がり、民衆の生活に根ざした実用のものへと変化しました。また、信仰の場における文字の呪術性はこの時代にも引き継がれ、人々の心を支えました。

こうした歴史を経て、現在、文字は私たちの生活に欠かせない存在となっています。